2014
vol.22
Feb

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
常務理事・事務局長／矢 野 正 行
編集責任者／小 川 良 太

〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX:078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg
IP:05031111874

フルス村々長（右から２人目）の説明を受ける

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2　2013年秋季ツアーの報告
P.2　オトカ前旗からのメッセージ
P.3　黄河流域は豊であった
P.4　庭木の健康診断11
P.4　絵本からのエコ・メッセージ18
P.5　黄土高原の植物21
P.6　中国西北地方の年越し
P.6　国際まちの保健室

2013年 秋季の中国植樹ツアー報告

昨秋日中の国際関係の懸念される状況のなかで、蘭州市とオトカ前旗への植樹ツアーを開催しました。蘭州市では昨春来日した三名の方々を含め指揮部職員の出迎えを受け第３期植樹基地で共に植樹作業を行いました。オトカ前旗では第１期３年目の活動を行いました。

事務局長　矢野正行

昨年10月、会員20名と共に甘粛省蘭州市と内モンゴル自治区オトカ前旗を訪れました。訪問前は、あまり良くない日中関係の状況から、自由に食事する事や相手方担当者との十分な打合せが出来るかどうか半信半疑でした。

そんな中、10月10日から３日間蘭州市を訪れました。上海経由で10日夜蘭州市に到着し、11日午前中には参加者会員で第３期植樹基地で自生種の植樹を行いました。その後の第１期植樹基地内にある招待施設での昼食会では白酒を飲みながら談笑をしたのですが、指揮部の皆さんの強いのにはついて行けませんでした。終了後、植樹基地内にある博覧園を見学し指揮部との打合せを行いました。

全員での植樹（蘭州市）
指揮部職員の郭さん（１児の母親です）

指揮部では４月に人事異動があったらしく、我々『黄河の森』との交流を始めた当初から蘭州市側の窓口であり現地植樹基地の責任者であった王万鵬処長が、指揮部内の共産党書記に転出され後任には王女史が就いておられました。張副指揮はそのまま南北両山緑化指揮部の植樹活動全体の実質的な責任者として残っており、我々との意思疎通は十分可能でした。打合せでは、まず13年度に支払う100万円を現金で手渡し、大変な感謝の言葉を頂きました。また、今後の支援について、『黄河の森』の財政状況から支援金を減額せざるを得ない事を伝えたところ、指揮部から「長く継続する事が何よりも重要であり今後もお互いになお一層の努力をしよう」との返事が返って来ました。この件に付きましては予算を考慮しながら決定しますが年間30万円程度になると考えています。

11日の夕方にはＫＦＧ発足の契機を作った柴生芳さんが、約300km離れた甘粛省定西市臨洮県から蘭州市のホテルに来られ旧交を温めました。やはり柴生芳さんも、現在国と国との関係はあまり良くないが我々の活動は市民レベルの「草の根運動」なんだから、今後もお互いに粘り強く続けて行こうとの事でした。

柴生芳さん（右から二人目）と
旧交を温める

内モンゴルオトカ前旗へは10月12日に移動し、13日には植樹とオトカ側窓口の婦女緑化協会との打合せを行いました。オトカでの植樹は今年で４年目に入り、新たな場所で植樹緑化を行うことになっていますが、今までと同様、沙漠化土地での緑化活動であり楊柴と沙柳による緑化も同じです。また今年も日中緑化交流基金からの助成金は500万円で決定しています。

植樹場所を訪れた20名の会員は地元の人々やオトカ前旗政府の方々と共に植樹を行うと共に、今までの３年間に植えた楊柴や沙柳が３メートル程度に大きくなった様子を見て回り、沙漠化した土地を緑に復元している状況を確認し『黄河の森』の環境への貢献活動を大いに実感して貰いました。今回の活動は地元テレビ局の取材班も同行し、一部始終を取材しました。会員２人もインタビューを受けました。まだ中国では理解され難い、我々の活動は個人の意思と負担で活動を行っていることを話しました。取材結果はオトカ前旗政府の国際交流活動として放映されたようです。

このようにオトカ前旗においても緑化活動を多くの住民に伝え、市民レベルの「草の根運動」として広く宣伝し継続させるため努力しているようです。

テレビ局のインタビューを受ける会員

オトカ前旗档案局・婦人緑化協会・フルス村役場幹部と日本のボランティアが植樹活動を実施

2014年１月オトカ前旗より昨秋の植樹ツアーに対して事務局に次記のメッセージが届きました。第１期の３年間のフルス村での事業は完了し、14年度よりは新たにハリサリ村で第２期事業を開始します。

昨年10月13日、環境保護に関心を持ち活動を志す、日本のＮＰＯ法人黄河の森緑化ネットワークのボランティア活動家20人が、中日友好自然緑化事業実施地のフルス村の植樹地に到着し植樹活動を行いました。緑化活動により生態文明を確立し、環境緑化活動にさらに多くの人々が植樹活動に参加するようにアピールしました。オトカ前旗档案局・婦人緑化協会・フルス村役場幹部達も共同して今回の植樹活動に参加しました。

中日友好環境緑化事業は日本の民間組織「黄河の森緑化ネットワーク」が、「日中緑化交流基金」からの支援金を受け、オトカ前旗城川鎮フルス村の事業―３年間（2011～2013年）・事業面積100haに資金を投じました。この事業はオトカ前旗の黄河沿岸地区のマオス沙漠地の自然環境条件の大いなる改善と、当地の農民が貧困から脱却する助けとなり、地方経済の発展促進さらに中日友好関係の増進に非常に大きな意義のある事業です。　（2014年１月17日）

黄河流域は豊かであった

ＫＦＧ会員　村上　鷹夫

黄河の森の仲間と共に初めて蘭州に来たとき、夜の空港に着きバスに乗ってしばらく走ったとき、バスの窓から観られた光景は数頭のヤクの群れでした。また市内の交通は自転車とバイクが主で、交通ルールが守られなく横断歩道を渡るのは命がけであったことは楽しい思い出です。10年余りたった今、空港付近は店や住宅が増えヤクの姿はなく、市内では自動車が主体で交通渋滞が頻発しているようです。そんな中で今回の植樹と、旅の中で目にした様子を少し書いてみました。

植え付け方の説明

蘭州の植樹した場所の様子は行くたびに緑が増え、一部は森の様になってきていました。特に記念碑の右手のコノテガシワはガイドの田さんの背丈の２倍以上に大きくなり、間伐が必要ではと思われました。緑化記念館周りは野菜が沢山栽培され、記念館の前は公園になり噴水までできていました。ちかくではまるまると太った土蛙が歓迎してくれました。今年の植樹方法は、以前していた「三水造林」ではなく直接穴に植え付けました。

植樹後の蘭州植物園で数十種類の大菊が展示されていましたが、全て背丈が20cm位で低いので何故かきいたが分からず、帰って近所の菊を作っている人に写真を見せると、これは背丈を低くする薬(ホルモン剤か)でホームセンターで売っているとの事でした。

夜には「黄河の森」設立の契機となり、何かとお世話になった柴生芳氏がホテルに駆けつけてくださり、しばし歓談しました。彼曰く、習主席の方針でいろんな場でお酒を飲む機会が少なくなったとの事でした。

内モンゴルでの植樹は、沙柳の枝を50ｃｍ位に切り砂に掘った穴に全て埋めました。また以前植えた沙柳は大きく育っていました。

蘭州・内モンゴルで植樹に行く道は、以前はガタガタでしたが今は全て舗装されていました。内モンゴルの夕食会の時、日本の歌を勉強していただき次々歌と踊りで歓迎していただいたが、当方からの歌のお返しがほとんどなく反省させられました。

植樹の後の旅は、銀川では西夏王国(11～13世紀)の王陵群を、鄭州では少林寺拳法で有名な少林寺で模擬演技を観劇し、途中の沿道にある沢山の学校で修行する生徒達を見てその組織力に感心しました。

洛陽は古い都の街並み・中国第一の古刹白馬寺・龍門石窟等を見学しました。龍門石窟は仏像を間近かで良く見ることができ写真も自由に撮れたので、敦煌の莫高窟より親しみを感じました。その他、博物館等日本では見られない色々なところを観ることができました。

カケス

今回の旅の全体を通して感じたことは、福岡県の一部にしかいないカササギがあちこちで観られ、その巣らしきものが大きな樹上に観られたことと、街灯に太陽電池が併設されており、以前旅したトルファンの大風力発電設備等を見るとき、エネルギーの大切さを感じ実行しているように感じました。

最後に今回旅した銀川・鄭州・洛陽は、歴史小説に沢山出てくるように豊かな土地であったのではとおもいました。それは車窓から観られる農村の風景と、今までの中国の旅ではなかった観光施設・レストラン・ガソリンスタンド等の便所が全て水洗で水も充分出たことでした。

黄河流域の楽しい旅をありがとうございました。

事務局からのお知らせ

第11回 通常総会の開催ご案内

【日程】　２０１４年５月３１日（土）　午後１時より
【会場】　中華会館　（神戸市中央区下山手通り２）
●総会終了後は講演会と親睦会の開催を予定しています。
（総会の詳しい予定は書面にてご案内します。）

2014年度 植樹ワーキングツアーの予定

昨秋に訪ねた蘭州市の第３期植樹地は、地元の人たちの努力もあり多くの木々が根付いていました。また、近くの木の陰から鳥が飛び出したり、営巣跡と思われるものもありました。

オトカ前旗の植樹は、今年度から第２期（４年目）にはいり、新植樹地（ハリサリ村）に移ります。日程は１０月中旬を予定しております。詳しくは総会、次号の本誌でお知らせします。

親睦会のお知らせ

会員間の親睦を図るために下記の行事を開催します。

＜ＫＦＧ歴史散歩＞

●日　時　平成２６年４月５日(土)
●場　所　宝塚市の古代遺跡　他
（中山荘園古墳・中山寺古墳他）
●集　合　売布神社駅（阪急宝塚線）
午前10時30分

＜筍狩り＞

●日　時　平成２６年４月２９日(月)
●場　所　京都府南山城郡和束町

※参加ご希望の方は4月20日までに事務局へご連絡ください。

私と環境(19) 庭木の健康診断 ⑪

樹木環境研究会議「ミルフィーユの会」
天 野 孝 之

庭木の手入れ ── 庭松 ──

前回に続き松の話です。「松」と言う固有の樹種はありません。「松」とは、クロマツ（黒松）、アカマツ（赤松）、ゴヨウマツ（五葉松）等のいろいろな松の仲間の総称です。関西では庭松としてクロマツが、関東ではアカマツが好んで植えられているようです。ここではクロマツ、アカマツを共通して松として話を進めます。クロマツは別名雄松、アカマツは雌松ともいわれます。クロマツはアカマツに比べ葉色が濃く、太いのが特徴です。葉が一箇所から２本出ており、二葉松ですが、外国のマツでは葉が三枚ある三葉松が多くあります。正月の生け花によく活けられる「ダイオウショウ（大王松）」は外国産松で葉が三枚あります。この松は松ぼっくりが特に大きいので有名で、クリスマスリースにもよく利用されていました。しかし、松笠の鱗片に固い刺があります。

さて庭松の手入れですが、年最低２回は手入れを行います。５月、枝の先端から新梢が急激に伸びてきます。５－６本あります。赤い毛で包まれているのがアカマツ、白いのがクロマツです。「ローソク」とよく言われますが、クロマツの色からきているのでしょう。これらの新梢をまず３－４本残し、他はすべて基部から折りとります。残された新梢は長さ1/2-1/3のところで折りとります。この作業を「みどり摘み」と言います。成長したとき、節と節の間を短くし、間延びした樹形を作らないためです。残す新梢は、新梢の伸びている方向を観察し、下向きに伸びているのはすべて折りとります。ジグザクに伸びた枝を作るためには、昨年伸びた枝の方向を見て、残す新梢を決めます。次に10－11月ごろ、昨年枝の葉をすべて取り除きます。この作業を

クロマツの枝に発生した地衣類
（庭木が衰弱すると着生します）

「もみあげ」と言います。松の葉は枝に２－３年ついていますが、古い葉は見苦しくなってきます。これらの作業を行うことによって、庭松は一段と見栄えがしてきます。

枝や幹に写真のような苔状の地衣類が付きます。松に限らず、いろいろな庭木や石にも付きます。これは庭木が弱っている証拠です。地衣類が付いたから庭木が弱ったのではなく、庭木が弱ったから地衣類が着生したのです。通風・日照が悪くなってくると付きやすくなります。また土壌条件が悪く根が十分生育できない庭土などでも発生します。

前回お話ししたように、重要な病害に「マツノザイセンチュウ病（松材線虫病）」があります。カミキリが運ぶ材線虫によって松が枯れます。材線虫を殺す殺線虫剤を樹幹に注入する方法と、土壌に灌注する方法があります。感染してからの駆除方法はありませんので、大切な庭松はぜひこれらの農薬を施用してください。葉を食べる害虫にマツカレハ（松毛虫）がいます。幼虫即ち毛虫の状態で冬を越します。冬、松の幹に藁を巻いてある風景を見られた方もあると思います。これは越冬する松毛虫をこの藁のなかに集め、２月ごろはずして毛虫とともに燃やしてしまう昔から行われている駆除方法です。しかしこの藁のなかに毛虫の天敵も潜り込むため必ずしもベストな駆除方法ではないと、最近問題になってきています。みどり摘みやもみあげ作業中に見つけられたら、スミパイン乳剤など農薬登録のとれた殺虫剤を散布して駆除してください。毛虫の毛でかぶれるかもしれませんので注意してください。病害では、「赤斑葉枯病」が良く発生しています。放置しておくと２、３年で真っ赤に枯れてしまうことがあります。葉の先端から1/2～2/3が赤く枯れてきます。一枚の葉全体が枯れることはありません。しかし葉先が枯れているため、離れて庭松を見ると、松全体が枯れているようにも見えます。罹病葉、落葉を丁寧に集めゴミとして焼却処分にしてください。樹勢回復のために、窒素系肥料を多く含む肥料を施肥してください。

絵本からのエコ・メッセージ 18 「はるにれ」

KFG会員 畑 中 弘 子
（児童文学者）

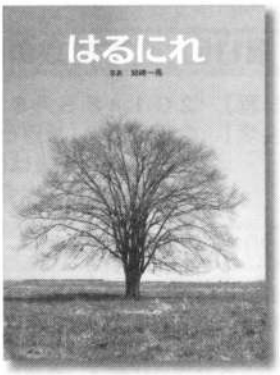
絵本は絵と文が相まって素敵に物語をつくり、私たちを楽しませてくれます。ところが今回紹介する絵本には文がはいっていません。絵ではなく写真がページを重ねます。

大草原に一本の木「はるにれ」が立っています。その木が四季折々に姿を変えていきます。どんよりとくもった冬空に、葉の落ちた「はるにれ」が繊細な線描画のように写ります。雪が降りつもった広大な大地にぽつんと立つ姿。樹氷を宝石のように身にまとった木。凍てつく世界で凜と天に向って立っている木。その木に朝日があたります。深い霧の中にぼんやり浮かんでいる幻想的な姿……。

やがて草原に春がきます。あたりが急に明るくなりました。「はるにれ」のまわりに、とびっきり上等の緑のじゅうたんがあらわれます。夜には真上に満月がでました。

「はるにれ」はしっかりと春を感じます。ねむっていた枝の新芽がふくらみ、葉が大きく豊かになっていきます。大草原のまんなかで緑の葉をいっぱい繁らせ、堂々とした姿をみせます。ひとまわりもふたまわりも大きくなった「はるにれ」の姿です。

たった一本の木の生長を写真で表現していく、文のはいっていない絵本。季節から季節へと移っていくすばらしい自然の営みを伝えてくれています。



写真：姉崎 一馬
福音館書店

黄土高原の植物㉑

マツの学名は男根に間違われ、アブラマツは色で人をまどわす

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（元高知大学農学部教授）

マツ（正確にはマツ属）の学名はPinusと書く。学名は基本的にラテン語を使うので、日本では一般にローマ字読みしてPinusは「ピヌス」と発音する。ところが英語圏の人が聞くと「ペニス」に聞こえるらしい。学名は世界に通じる共通語であるから、国際集会などでは学名を使うことになる。ある人が国際集会で日本のマツをローマ字読みで紹介したところ、誤解を受けて困ったという話を聞いた。私もその話を聞くまではピヌスと発音していたが、以後は英語読みをして「パイナス」と発音することにした。学名の発音には細かい規則もあるが、一般には英語読みが無難なのかもしれない。

閑話休題。今回の主役は黄土高原全域を含む14の省・自治区・直轄市の広い範囲に分布する油松（ついでに学名を書くとPinus tabulaeformis）である。すでにこのシリーズのNo.15で油松を取り上げているが、側柏（コノテガシワ）、刺槐（ニセアカシア）とともに黄土高原の三羽烏ともいえるので、再度話題にしてみたい。

実はこの植物、たいへんややこしい。1919年に日本人の植木氏が、油松の樹皮に赤っぽいのと黒っぽいのがあることから、紅皮油松と黒皮油松の２つに分け、それぞれ日本名をマンシュウアカマツ、マンシュウクロマツとした。その後紆余曲折をへて、1978年の「中国植物誌 第７巻」は普遍的な種として油松があり、それに黒っぽい樹皮の黒皮油松と、地際から幹が叢生する掃箒油松（掃箒はほうき）の２つの変種があるとした。杉本氏の「世界の針葉樹」(1987年）はこれをほぼ踏襲し、油松をマンシュウアカマツ、黒皮油松をマンシュウクロマツとし、掃箒油松にはセンザンマツの名をつけた。こうした経緯から日本では油松をマンシュウアカマツと呼ぶことになる。ところが油松には中国で黒松という別名がある。もちろん日本のクロマツとは関係ないが、やはりクロのイメージも強いのか、油松をマンシュウクロマツと呼ぶ人もいる。私もNo.15の最後でクロにとらわれた記述をしてしまった。アカだクロだで混乱するので油松は読みどおりアブラマツでよいと思う。

アカだクロだで人をまどわすのはなぜだろうか。樹皮の色は遺伝的なものではなく、生育地ごとに異なる環境条件の微妙な違いが影響しているのかもしれない。あるいは遠く離れて育ったために起こる「地理的変異」なのかもしれない。アブラマツはまだまだ研究の余地を残している。いずれにしても色にはまどわされないほうがよいようだ。

黄土高原北部のオルドス市ジュンガル旗に生育する樹高２５ｍの油松王
「オルドス」（人民美術出版社、1988年）より

さて、2013年の秋、蘭州からほぼ東方に450kmほど離れた子午嶺へ西安の方向から出かけた。この山塊には黄土高原で最大の森林地帯が広がっているといわれ、かねてから行きたいところであった。立派な森林の広がりの中に、蘭州近辺では見かけない天然のアブラマツ林があった。おおよそ人の破壊がなかったのと雨が年に蘭州の1.5～２倍の600㎜前後降ることがその成立の理由のようだった。アブラマツ天然林をながめながら、人の活動と水、これに緑化がどう絡めばよいのか、改めて思いをめぐらす機会になった。

六甲山クリーン＆グリーン活動

六甲山植樹　－住吉山手10期植樹－

●開催日時　2014年３月８日（土）
午前９時
山桜の他約50本の苗を植える予定です。
※雨天の場合は15日（土）に順延
●集合場所　ＪＲ住吉駅南広場
●服　　装　長袖、帽子、運動靴
●持 参 品　弁当、飲み水、軍手、雨具、タオル

●開催日時　2014年６月７日（土）
午前９時
●集合場所　ＪＲ住吉駅南広場
●服　　装　長袖、帽子、運動靴
●持 参 品　弁当、飲み水、軍手、雨具、タオル

六甲山クリーンアップ活動
－身近にできることから始めよう－

●開催日時　2014年９月20日（月）
午後２時
●集合場所　華僑会館
●コ ー ス　再度山ハイキング道
●服　　装　長袖、帽子、運動靴
●持 参 品　飲み水・軍手・雨具
タオル

最近は参加される方が固定化しています。新しい方の参加をお待ちしています。参加できる方は、事務局までお知らせください!!

中国便り

今年の春節（旧暦正月）は１月３０日でした。現在の日本では新暦での行事が定着していますが、中国をはじめアジアの多くの国々では今も旧暦で盛大に祝います。神戸でも華僑の人々の龍舞が繁華街を練り歩き、多くの観光客も押し寄せ賑わいました。

中国西北地方の年越し

兵庫県立大学国際地域看護研究科院生　楊　玉　麗

春節は旧暦の正月に当たり、年越しとも云い中国の最大の祝日です。言い伝えによれば「年」とは毎年元旦に出てきて人を食う凶悪な動物とされています。人々は獣が現れると顔を赤くして、爆竹を鳴らし赤い服を着、赤い提灯を灯し、赤紙を貼り「年」を追い払います。こうして「年」を追い払うことができたので、人々は新年を祝うようになりました。これが中国の年越し行事の由来です。

中国には56の民俗がいます。民族ごとに独自の祝日があります。地域・民族風習の違いがありますが年越しは56民族共通の祝日です。下記では典型的な北地域の風俗・習慣を御紹介します。

第１は北京地方のお話です。日が暮れると赤い提灯を掲げ「対聯」と「門神」を貼り、年越しの夜は食後に爆竹を鳴らします。元旦は夜明け前に起床し、神や祖先にお香を供え、爆竹を鳴らします。２日から15日の間は近隣に住む友人を訪問し合い、顔を合わして「新年おめでとう」と言って新年の挨拶を交わします。そして、新年の行事は祖先廟に移り、寺院や廟に行って、そこでの各種の行事に参加します。境内には人気の芝居が公演され・伝説の人物の人形・飾り灯篭と色鮮やかな旗・氷砂糖・美味しい食べ物・骨董の書画となんでも揃っています。老人と一緒に過ごす時間のない人達にとっては好い機会です。子供たちは見物や買い物をし、演芸を見、美味しいものを食べます。大変な熱気があります。

第２は西北地域の風習です。西北の風習は古い様相をのこしています。春節は郷土の雰囲気とその地域の特色を色濃く残しています。日没になると「対聯」を貼り、赤い提灯を掲げ、住いの周りを掃き清めます。元旦は夜が明けきらないうちに起床し、最初に門を開け放ち爆竹を鳴らします。その意味するところは門を開け「大吉」を呼び込むことです。続いて老人達は祭壇に燈明を挙げ、神を迎えるのに勤しみます。２日は社に燈明を挙げ、「ヤンコ踊り」を踊ります。これらの行事は飾り提灯を片付ける小正月の15日まで続きます。筆者は西北出身です。子供のころはいつも燈明を挙げ、踊りに参加していました。これは子供時代の最も楽しい思い出です。

地方色が違い風俗習慣も同じではないですが、中国の春節行事は同じです。一つは年越しの夕食です。中国人にとって毎年のもっとも大切な団欒です。特別な理由がない限り両親の家で食卓を囲むのが必須です。二つ目は祖先祭祀です。年越しに必ず行う行事は民族が違えば、その内容も様々です。三つ目は爆竹を鳴らすことです。安全を考慮して多くの都市では爆竹を燃やすことは禁止されています。少数の地区では年越しの際には、絶え間なく爆音が聞こえます。騒々しいとはいえ、子供達には中でも男の子にとってはもっとも楽しい行事です。四つ目は主に提灯・門神・対聯等の赤色です。そのうえ、商店が売る贈答品の包装紙も赤色が主流で、お祝い気分で一杯です。年が明けると、中国では少なくとも七日間は休日です。大多数の人々は幼児は別として家族で団欒します。さらに休息も取らずに、プレゼントを持って親戚に年始回りに行きます。子供たちは新しい服を着、大人にお年玉をせがみ、貰えると大喜びをし心ゆくまで遊びます。私は日本で２年過ごしましたが総じて日本の年越しは静穏で、中国の年越しには大層な熱気を感じます。日本の年越しは休息をとるには好都合な地です。中国の年越しは大変疲れます。私は日本の正月の過ごし方が好きです。

注	対聯	紙・布に対句を書いた家の外の柱などの掛物
	門神	春節に魔除けとして門の扉の上に貼り門を守る神像
	扭秧歌	田植え踊り・ヤンコ踊り。太鼓やドラに合わせて歌い踊る中国北方地域の民間舞踏

「国際まちの健康保健室」の活動

「国際まちの健康保健室」は兵庫県立大学大学院呉小玉教授の指導のもと活動している組織です。兵庫県立大学大学院看護学研究科では、国際保健・国際地域看護に関する幅広い知識を得て、国際社会における地域住民の健康促進や健康問題の解決手法あるいは、国際地域看護の課題の解決法を研究しています。この活動は兵庫県看護協会東播支部の「町の保健室」の拠点として登録しています。

「国際まちの保健室」の活動は「世界中のすべての人々の健康を保持・増進する」という世界保健機構（WHO）の精神のもと、日本在住の外国人が言語・生活習慣の違いによって引き起こされる軽微な症状や、心の悩みについて気軽に相談できる場所を提供する、在日外国人向けの健康推進プロジェクトです。皆さんの身近におられる外国人で、健康問題や不安を抱えている人がおられましたらこの保健室をご紹介ください。事前申し込み・費用は不要です。日本語のほか、英語、中国語・スペイン語・ポルトガル語でも対応します。

●日　程　2014年４月～2015年２月までの毎月第２土曜日14:00～16:00（受け付けは15:30まで）
［５月の開設日は18日（日）です。10月の開設日は26日（日）、会場は姫路市に変更になります。］
●検診相談内容　身長・腹囲測定、体重測定（体脂肪その他含む）、ヘモグロビン値、骨密度、動脈硬化、健康相談、子育て支援
●対象者　在日外国人とその家族
●会　場　兵庫県立大学明石校区地域保健開発研究所（明石市北王子町）協力・共同運営：明石市国際交流センター、国際地域研究会メンバー看護師ボランティア、学生ボランティア、一般ボランティア
●連絡・問い合わせ先　☎078-925-9652　E-mail:shogyoku_go@cnas.u-hyogo.ac.jp

※本誌に「中国便り」を寄稿していただいている楊玉麗さんは、兵庫県立大学大学院で学んでおられます。その傍ら所属する研究室が主催する「国際まちの健康保険室」のボランティア活動にも参加しておられます。１月末日、指導教授の呉小玉さんと共に事務局を訪れられて、活動状況の説明共にＫＧＦ会員の身近におられる人達への周知を依頼されました。事務局ではこの要請に協力をすることになりました。